

「日本舞踊のころ」にふれたひと時 鷺見八重子

7月16日（土）午後、かながわ県民センターにて久しぶりに対面の支部会が開かれ、例会の前に、西村寿美子さんから「日本舞踊のころ」と題してお話を伺い、実演のDVDを拝見しました。知らない世界を案内していただきながら交流を深めたいという企画で、支部会員5名に加え東京支部から6名の方が参加されました。

西村さんは3歳より花柳徳兵衛師に師事し、17歳で家元花柳寿輔師に名取の資格を許可され教授の証を授与されます（昭和33年）。名取名は、花柳 衛扇（はなやぎ えせん）。以来、数多くの舞台を踏まれただけでなく、教授として国内外の弟子を育てて来られました。日舞を習い始めたきっかけは、戦地へ赴く父上が、身体が弱かった娘を案じて何か運動をと言いつつ残されたのでした。日舞は良家の子のお稽古ごとの一つでもありました。

花柳流は、坂東流や藤間流と並び5大流派のひとつ。能（静）と歌舞伎（動）に継承された形（かた）を基本としつつ、さらに花柳界を愉しませる進取の趣向（しぐさ）を多様に取り入れ、華麗な舞台芸術として明治から現在まで多くの庶民に親しまれてきました。「日本舞踊のころ」とは、虚々実々、架空の世界と人間の現生が幾重にも重なりあった時空に遊ぶこと、と言えるかもしれないと思いました。

舞踊をささえるお囃子には長唄、清元、常磐津、浄瑠璃、義太夫などあります。お話のあと義太夫「信田妻道行」（しのだづま みちゆき）と、長唄の名曲「角田川」（すみだがわ）を観ながら、その違いを体感しました。

信田妻道行は、恋人を亡くした男が信田の森にやってきて若い娘（キツネの化身）と結ばれる異類婚姻譚による物語です。「つるの恩返し」と同じように別れの時が来るのですが、娘の恥じらいや哀しみは、招き猫のような手首のしぐさでキツネと分かり、まさに虚と実の挟間を花柳衛扇師は美しく演じきられ、おもわず固唾をのんで惹き込まれました。

「角田川」は歌舞伎、文楽でもよく演じられます。行方不明となった幼い梅若丸を探してはるばる京から隅田川までやってきた母親が、渡し船の船頭から、人買いに連れられてきた子がこの河原で死んだと聞き、その子こそ我が子と知る物語です。朗々とした台詞のやりとりが舞踊の緊張感を高め悲劇の大団円にいたります。凜として気高い西村師にただただ見とれてしまいました。清々しいひと時をありがとうございました。



信田妻道行



角田川（上と右）

